

仏教における内科疾患

杉田 暉道

介護老人保健施設 すこやか

受付：平成20年12月18日／受理：平成21年5月1日

第1章 仏教の教え

仏教とはどのような教えであろうか。仏教は紀元前200～400年に生存されたといわれている、釈迦によって開かれた。釈迦は、われわれ人間の最大の悩みである。生まれて老人となり、または病気にかかって死亡する、いわゆる生老病死の苦しみを、何としても解決したいと決心され、29歳の時に出家して、6年間苦行された。しかし満足できる悟りを得ることができなかった。この時にナイランジャナ川のほとりで、村娘のスジャータから乳で作ったお粥の施しを受けられ、体力を回復され、ブッダガヤの菩提樹のもとで瞑想を行い、35歳の時に悟りを得られた。その悟りとはどのようなものであったのか。

この教えは、先ず我々の人生は苦しいものであると考えた。それではなぜ苦しいと考えたのか。その原因は、人間は、誰でもえらくなり、金持になる。そして立派な家に住みたいという、沢山の物欲を十分に満足させることができないからである。したがってその欲望をなくしてしまえば、人生の苦しみはなくなり、清い心になると考えた。そして、この清い心を長く維持するには、8つの正しい行い(八正道)¹⁾を実行し、身体を健康にすることが必要である。

それでは、8つの正しい行いを述べよう。先ず第1には正しく見ること、第2には正しく考えること、第3には相手の人によくわかるように、正しくやさしく話すこと、第4には、正しい行動をすること、第5には正しく生活すること、第6には一心に努力すること、第7には心を正しく落ち

着けること、第8には精神を正しく統一すること、である。

かくして、心身ともに健康になっても、常に完全にこの状態を維持することはむづかしい。ちょっとした油断で、心身の健康がくずれて、先ず内科疾患におかされる危険が常に存在する。これについて述べよう。

第2章 内科疾患²⁾

1. 4大元素の不調による疾患³⁾

インド人は、人間が正常に活動するには、人間を形成する、風、火、水、地の4大元素が正常に機能しなくてははいけないと考えた。すなわち風大元素は、呼吸や体のエネルギー代謝が正常に行なわれるようにする機能があるので、これが正しく活動しなくなると、風病をおこす。火大元素は胃や腸の働きを正常にする機能があるので、これが正しく活動しなくなると、火病をおこす。水大元素は血液の働きを正常にする機能があるので、これが正しく機能しなくなると、水病をおこす。地大元素は筋肉や骨の働きを円滑にするので、これが正しく機能しなくなると、地病をおこす。かくして4大元素の不調による病気の数、風病、火病、水病、地病のそれぞれに101病あるので、合計では、404病となる。

次に4大元素の不調による病気と季節との関係を検討すると、春には水病が、夏には風病が、秋には火病がそれぞれ発生し易く、冬にはこれら3種の病気の合併症を発生し易い。従って春にはしぶい味、熱いもの、辛い味のするものを、夏には、油っこいもの、熱いもの、塩からいものを、秋に

は冷たいもの、甘いもの、油っこいものを食べ、冬には、すっぱい味、しぶい味、油っこいものを食べるように注意すれば、病気に罹らない。と述べている。

2. マラリア

十誦律に、病気とは、寒けがし、熱が出て、汗が沢山出たら、消化しやすい食事がよい。とあり、また四分律に、あるとき、多くの出家僧が寒気がして震えが止まらなかった。これを見たブッダは、「厚い衣類を着なさい。それでも寒いなら寝具や床の敷物で身体を包みなさい。それでも寒気が止まらないなら、出家僧が患者の身体をくっつけて寝なさい。」と述べている。

3. 痘瘡

五分律に「びらたしか」という名前の出家僧の皮膚に多数の小さなおできができ、これがくずれ、ただれて、見るができないほど汚くなってしまった。」とある。

4. かぜ

十誦律に5例の症例について、治療を述べているので、それを紹介しよう。すなわち、No.1はおかゆを食べる、No.2は呵梨勒カリロクを飲む、No.3は油をぬる、No.4はニンニクを食べる、No.5は身体を洗う、である。

5. 秋時病

この病気は秋にかかり易い。そして発病すると、急に発熱し、嘔吐をおこし、体がやせ、体力が衰え、病気が重くなると皮膚が黄色になる。治療には、バター、蜂蜜などを与える。本病はガンジス河流域に毎年流行する。

6. 肺結核

この病気は経典では乾瘦病ケンショウビョウといわれている。病気が進むと、体がやせてかさかさになるからである。また、「出家僧が読経していると、胸が痛んで血を吐いた。これを見た医師は、この病気は長期間、石蜜を取る必要がある。」と述べた記事

が摩訶僧祇律にみられる。この記事から、この病気の治療には、栄養のあるものを摂取するのがよいことを知っていたことが、うかがわれる。

7. てんかん

この病気については、四分律に次のような記事がみられる。顛狂病テンキョウビョウ(てんかん)に罹った出家僧が教団内に存在していた。彼は殺牛処(屠殺場)に行って牛の生肉を食べ、生血を飲んだところ、病気が完全に治ってしまった。しかし、彼は自分の行った行動が恥ずかしくなって小さくなっていった。釈迦はこれを知って、「彼の行動は罪にならない。若し他の出家僧がてんかんに罹って、牛の生肉を食べ、生血を飲んで病気が治るなら、その治療は用いてよい。」と、他の出家僧に述べた。

8. 黄疸

この病気については、摩訶僧祇律に次のように記している。ある出家僧が黄疸に罹って困っていた。医師はこれを見て、釈迦に「この患者は人血を飲めば治るが、他の治療法では治せない。」と言った。

丁度この時、悪事を行った一人の住民が、両手を背中に廻されて縛られ、赤色の布を首に巻かれ、太鼓を打ち鳴らされながら町中を引き廻されて、刑場にひっぱり出された。これを見た一人の出家僧は、処刑する役人に「わたしは黄疸にかかり、これを治すには、生きている人の生血が必要なのです。どうか、罪人の血をいただけませんか。」と頼みこんだ。これを聞いた役人は、「病気を治すのに、生きている人の血を必要としている人には、いつもあげているので、もしお望みならあげますよ。」と言った。これを聞いた出家僧は、大変喜んで早速罪人を寝かせ、刀で首の血管を切って血を出し、両手でその血を受けて飲んだ。これを見た住民達は、その出家僧を非難し、「この男は人間を食べる鬼だ。」と口々に叫んで、瓦や石や土塊を出家僧に投げつけた。出家僧達はほうほうの態で、やっとここを逃げ出すことができた。これを知った釈迦は、この出家僧に「これは悪い事である。たとえ罪人であっても、彼の命は

大切にしなければいけない。」と戒しめた。

9. かいせん（水虫）

これについては摩訶僧祇律に次のように記されている。出家僧の中にかいせんにかかって悩んでいる者がいた。釈迦は「馬の血液を患部にぬるとよい。そしてぬり終わったら、他の出家僧と一緒に生活してはいけない。離れた場所で住む家を別々にして生活をしなければいけない。」と注意している。さらに釈迦は、かいせんを患った者の身体を火であぶって治すことを許した。

10. 白内障

白内障を人血を用いて治したことが四分律に記されている。

参考文献

- 1) 杉田暉道. ブッダの医学. 東京：平河出版社；1987, p. 44
- 2) 杉田暉道. やさしい仏教医学. 東京：出版新社；1997, p. 66
- 3) 大日方大乘. 仏教医学の研究. 東京：風間書房；1965, p. 43